

More than Five

— 共感覚が浮き彫りにする五感以外の感覚 —

山 田 仁 子

徳島大学教養部紀要（外国語・外国文学）第3巻 別刷

1992年3月

Journal of Foreign Languages and Literature

College of General Education

University of Tokushima

Volume III

March 1992

More than Five — 共感覚が浮き彫りにする五感以外の感覚 —

山 田 仁 子

More than Five — Three More Senses in Synesthetic Metaphors —

Hitoko YAMADA

Abstract

It is commonly said that we human beings have five senses — touch, taste, smell, vision, and hearing. This classification of senses depends on the fact that a human being has five kinds of sense organ — skin, tongue, nose, eyes, and ears. However, synesthesia in language indicates that we have additional senses.

This study examines synesthetic metaphors in Japanese. Synesthetic metaphors are expressions in which the words or phrases proper to one sense describe the experiences of another sense. When we describe our experiences of one of the five senses, we can use three types of expressions. Words proper to that sense, explanatory expressions such as “nakitakunaru-yohna iro” (=a color which makes me cry), and synesthetic metaphors (that is, words which originally relate to another sense).

Some words like “hukai” (=deep), “hageshii” (=violent), or “sabishii” (=lonely) describe the experiences of some of the five senses, like “hukai oto” (=deep sound), “hageshii iro” (=violent color), and “sabishii iro” (=lonely color). But they do not originally relate to any of those senses, and are not explanatory either. These expressions are synesthetic metaphors and the adjectives must be words of some senses other than the five. The existence of these synesthetic metaphors proves that we have three more senses other than the five, at least in Japanese, — “dimension,” “movement,” and “mood.”

序

人が手や舌や鼻や目や耳で感じる感覚を五感という。五感を表すことばとしては、まず当然のことながら、それぞれの感覚に固有の表現が挙げられる。“固い”“甘い”“くさい”“うるさい”“赤い”などがこれにあたる。こうした表現はまた共感覚に基づいて、五感内の他の感覚を表現するのにも用いられる。“柔らかな味”“甘い色合い”といった具合に、味覚を触覚に固有の表現で、また視覚を味覚に固有の表現で表せるのである。

五感を表すことばとして次に挙げられるのに、具体的、説明的な表現がある。つまり、問題の感覚を引き起こすもとなる物や状況、あるいは引き起こされる状況を持ち出して感覚を説明し、聞く者にこの感覚を類推させるのである。“汗の匂い”“栗のはぜる音”“思わず顔が歪んでしまう

ような味”など、この種の表現は自由に数限りなく作り出すことができる。

五感を表すことばとして、まず大きく分ければ二種類、つまり五感に固有の表現と説明的表現があることを上に述べたわけだが、この二種類以外にも五感を表現することばが、数は多くはないが存在する。“深い香り”“激しい色彩”“さびしい色”といった例に見られる形容詞は、五感に直接には結び付かず、かと言って説明的とはいえない。

こうした表現における形容詞は、本来五感のどれかを表すというものではないが、被形容語の五感に対する形容の仕方は全く感覚的である。形容詞と被形容語を結び付けるものは共感覚しかあり得ない。共感覚が介在するということは、これら形容詞自体も感覚を表しているということの意味している。共感覚比喩とは“ある感覚モダリティの形容語で別のモダリティの感覚経験をたどる比喩表現”（楠見1990）だからである。

上に見たような五感以外の形容表現を含む共感覚比喩の存在は、五感以外の感覚の存在を示している。五感の場合は目、鼻、口、耳、皮膚というように感じる場所がはっきりしていて、それぞれの感覚の存在、分類ははっきりと認識しやすいが、五感以外の感覚となると体のどこかにこの感覚を受容する特定の器官があるわけではなく、感覚の存在は気付かれにくい。しかし我々人間は確かに五感とは別の感覚も持っている。特定の受容器官はないが、いくつかの共感覚的表現が、五感以外にも感覚があることを証明している。

本論ではこうした五感を表しはするが五感に固有のことばではなく、また説明的とも言えない表現、つまり五感以外の感覚を表すと思われる表現を観察分析し、それがどういった種類の感覚を表すものか明確にしていきたい。

1. 次元 感 覚

まず挙げられるのは、次元を表すことばである。具体的には次のようなものがこれに当る。¹⁾

大きい、小さい、広い、狭い、太い、細い、厚い、薄い²⁾、高い、低い、
上、下、浮いた、沈んだ、浅い、深い、豊かな、乏しい、虚ろな、平かな

他にも、“大ざっぱな”“か細い”“繊細な”“細やかな”“薄っぺらな”など数多くあるが、何れも上に挙げたもののどれか的一种として考えられるので、本論で全てを表示することはしない。上に挙げた次元を表すことばについて五感の表現可能性をみると後で示す Table 1 のようになる。ただしここではごく一般的と思われる用法のみを記している。状況により容認の可能性が高まるものもあるであろうし、詩などにおいては多様で自由な組み合わせが可能となるが、本稿ではこうし

1) 本稿における語の分類は、『日本国語大辞典』（小学館）に記載の内、感覚を表す意味として最も古いとされる用法に基づいている。

2) ここでの“薄い”は“厚い”の対語であって、“濃い”の対語としての“薄い”ではない。

た場合は扱わないこととする。また、五感を表す代表的な名詞、“てざわり”“味”“におい／香り”“色”“音／声”を次元の形容詞が形容できるかどうかを中心に判断し、表の左端に挙げた基本的な次元形容詞がそのまま問題なく形容できる場合を○、基本的な次元形容詞は使われないがその意味を含む他の次元形容詞が使われ得るか、あるいは五感を表すやや特殊な名詞でなら組み合わせ可能な場合を△とその例で示している。古い用法で例があるものも△で示す。例えば、“上”“下”には、現在では用いられないが、例(1)に見られるように“高音”“低音”という意味の用法が以前にはあった。“浅い”についても、現在はないがかつては次に挙げる例(2)、(3)に見られるように、嗅覚、視覚にあてはまる用法があった。“平かな”にも、(4)のように聴覚を形容する古い用例が見られる。

- (1) うへより言ひて落す也 (申楽談儀 — 音曲の位の事)³⁾
- (2) 花の香は散りにし枝にとまらねど移らむ袖にあさくしまめや (源氏 — 梅枝)
- (3) 二葉より名だたる園の菊なればあさき色わく露もなかりき (源氏 — 藤裏葉)
- (4) コエ tairaca (タイラカ) ナリ (ロドリゲス日本大文典)

“乏しい”については次の(5)に挙げるように一見味覚と結びつくと見える例もあるが、ここでは“味わい”という名詞自体が比喩表現で、味覚としての“味”というより“物事のおもむき”という意味で用いられている。本来の味覚の意味ではこの組み合わせはむずかしいと思われるので、表でもこの組み合わせはないものとして扱っている。

- (5) いわゆる巨匠の大作のたぐいはつねづね敬遠している。小説でも有名作家の「力作長編」は好まない。意図は壮大でも味わいとぼしく、長さのわりには内容空疎なことが多い。(朝日新聞 1991.10.12)

3) 各例においては、問題となる感覚の形容詞、あるいはこれに感覚を表す名詞を組み合わせたものに、下線を施している。

	触 覚	味 覚	嗅 覚	視 覚	聴 覚
大きい		△大味			○
小さい					○
広い					△広がりのある音
狭い					
太い					○
細い	△細やかな	△繊細な	△繊細な	△繊細な	○
厚い					△厚みのある
薄い					
高い					○
低い					○
上					△
下					△
深い		○	○	○	○
浅い			△	△	
浮いた ⁴⁾					○
沈んだ				○	○
豊かな		○	○	○	○
乏しい					
うつろな					○
平かな					△

Table 1.

上の表からわかるように、聴覚には次元の形容詞がかなり自由に使える。“高い”“低い”という捉え方ができると関連するが、“声を落す”というように次元を表す動詞表現も可能である。

聴覚に較べると、他の感覚を次元感覚で表現する例はかなり少なくなる。聴覚以外の感覚にも使える数少ない次元形容詞の一つに“豊かな”という次元形容詞があるが、このことばは他の次

4) “浮いた”には、次元感覚にあたる“水底、地面などより上にある”という意味の他に、次章で論じる“動静感覚”にあたる“動いてさだまらない状態にある”という意味もあり、両方の意味を合わせもって使われることも多い。次の例においても、“深い”と対照的に現れている点からすると、次元感覚を表すと考えられるが、やはり“浮わついて落ち着かない”という動静感覚の意味合いも含まれていると思われる。

愛は真面目である。真面目であるから深い。同時に愛は遊戯である。遊戯であるから浮いてゐる。

(夏目漱石 - 野分)

元形容詞とは異なる意味要素を持っている。他の次元形容詞が主に物や空間の形についての表現であるのに対して、“豊かな”はいわば空間の中身についての表現であり、量的な意味合いを持っている。

更に言えば“固さ”“甘さ”“赤み”などについてはその度合いが“高い”“低い”と言える。この場合も感覚の数量化が行われている。感覚の強さを程度として数量化して、ここではそれをさらに“高さ”という次元の概念に置き換えている。聴覚以外の四つの感覚も、数量化することにより、次元の感覚で捉えやすくなるのである。もっとも、“細やかな味わい”“深い香り”といった表現は可能であるから、聴覚以外の感覚を次元感覚で捉えるのに数量化が絶対必要というわけではない。

共感覚を扱う研究において、次元の感覚は、Williams (1976) を始めとする幾つかの論文で触れられているが、五感のみを扱い、次元については触れていないものも多い。はっきりした固有の受容器官がなく、また味覚や聴覚に対する“味”や“音”のような、感覚そのものを表す名詞もないため、意識されにくい感覚であるためであろう。しかし言語現象を注意深く観察すれば、五感特に聴覚を形容できることばの中に、五感以外のものが存在していることは明らかであり、その一部は空間次元に関するものとしてまとめられる。こうした言語上の事実がある限り、共感覚的比喩を論じる際、次元の感覚を無視すべきではないであろう。

また次元の感覚というのが実際にどういった種類の感覚かということについては、Hall (1970) が参考になる。次元の受容器官は一つではない。人は手足や皮膚、鼻、目、耳、つまり触覚、嗅覚、視覚、聴覚全てを使って、空間を捉える。Williams (1976) は“*visually perceived dimension*”と、次元を視覚の一種としているが、目が見えない人でも“高い”“低い”といった感覚は知覚する。次元感覚とはあらゆる感覚を使い、体全体で空間における物体の存在の仕方を捉える感覚であると言える。もっとも味覚が次元感覚に寄与する状況というのは想像し難いが。

ただ、次元の感覚には、先ほど述べたように、味覚や聴覚に対する“味”や“音”のような感覚そのものを表す名詞がない。“高さ”“広さ”などのことばは、味覚における“甘さ”“辛さ”のように、あくまで次元感覚の一面だけを指すことばであって、次元の感覚全体をまとめて表すことばではない。従って、“次元以外の形容詞+次元の名詞”という組み合わせを作ってみることもできないため、五感を表すことばが次元感覚を形容できるか否かはテストのしようがない。そのため次元の感覚を五感の感覚で捉えられるかどうかについては、具体的根拠は見いだせないものの、無理であると思われる。

2. 動 静 感 覚

五感を共感覚に基づいて表現できる五感以外の感覚として、次元感覚の次に動静感覚が挙げられる。動静感覚とは動きに対する感覚である。具体的には、次のようなことばがこの感覚を表している。

激しい、穏やかな、静かな、荒い、弾んだ、はやい、おそい

動静感覚のことばも五感を表現し、五感を表す名詞を形容することができる。上に挙げた語について、五感を表現する可能性を表にすると次のようになる。ただし、判断の基準、表記方法は、次元感覚の場合に準じている。

	触 覚	味 覚	嗅 覚	視 覚	聴 覚
激しい		○	○	○	○
穏やかな		○	○	○	○
静かな			○	○	○
荒い(荒々しい)					○
弾んだ					○
はやい			△		
おそい					

Table 2.

今は使われないが、“はやい”には、嗅覚を表す用法もかつてはあった。次の例で“早う”というのは、“香りが激しい、きつい”ということの意味している。

(6) 丁字の香極(いみじ)く早う聞(かが)ゆ (今昔 - 30.1)

また、“荒い”は現在では“荒々しい声”“声を荒げる”といった形で用いられ、“荒い声/音”という表現は一般には用いられない。しかし、古い用法では(7)のように“あらき”という形でも用いられている。

(7) 風いみじう吹き、潮高う満ちて浪の音あらき事 (源氏 - 明石)

次元を表すことばと同様、動きを表すことばも共感覚に基づいて五感を表現できるのだから、次元感覚と同様、動静感覚と言える感覚も人には備わっていると考えられる。この感覚は次元感

覚と同様で、一つの特定の受容器官から受け取る感覚ではない。物の動きは、目で見える物の移動状況、耳に聞こえる音の変化、肌に触れる空気や水や物の動きなどから感じとられる。つまり複数の受容器官から認知可能な感覚なのである。

また、動静感覚を五感固有のことばが表現できるかという問題については、触覚に関しては可能であると言える。動静感覚を表す名詞を“動き”とすると、“なめらかな”“にぶい”“鋭い”“ゆるやか”“軽い”など触覚の形容詞を組み合わせることができる。

3. 気 分 感 覚

五感を形容できる五感以外のことばとして、次元感覚、動静感覚を表すことばの次に挙げられるのは、気分を表すことばである。具体的には次のようなものがこれにあたる。

やさしい、さわやかな、陽気な、陰気な、さびしい、悲しい、楽しい、苦しい、

楠見（1988）では、“甘い思い出”“彼は冷たい人だ”というように、五感を表す表現が気分、記憶、考え、性格などの心的状態を表せることが示されているが、本来心的状態を表す表現が五感を表すかどうかについては触れられていない。

しかし上に挙げたような、特に“気分”を表すことばには、五感を表せるものがある。五感を感覚的に表現できるということは、やはりそれ自体も一つの感覚を成すものと考えらるべきであろう。次元感覚、動静感覚を論じる中でも述べたように、何らかの感覚を表すものだけが共感覚に基づいて他の感覚を表現できるのである。下に気分感覚の語が五感を表現できる可能性を表にして示す。

	触 覚	味 覚	嗅 覚	視 覚	聴 覚
やさしい	○	○	○	○	○
さわやか		○	○	○	○
陽気な				○	○
陰気な				○	○
さびしい				○	○
悲しい				○	○
楽しい				○	○
苦しい					

Table 3.

ただ、ここで注意しなければならないのは、本論の初めでも触れた具体的、説明的な表現を、共感覚に基づく表現と混同しないことである。“いらいらした声”“怒った声”における“いらいらした”“怒った”という形容は感覚（ここでは聴覚）を引き起こすものとなるもの、つまり声の持主の状態を言っているのであって、声そのものを表現しているわけではない。“おもしろい色”“うれしい声”“腹立たしい声”などに含まれる形容表現も、感覚そのものを表現すると言うより、人が視覚や聴覚で何かを感じた後にどうなるかを言っているだけである。“叫びたくなるような辛さ”“うんざりする匂い”と変わらない説明的表現と言える。表面的には、[気分感覚を表す形容詞 + 五感の名詞] となっても共感覚に基づいた表現でないことは多いのである。また、同じ表現でも使われる状況で、説明的な場合と、共感覚に基づいた場合とがあり得るし、どちらも判別し難いこともある。例えば、“悲しい色”という表現の場合、その色を見て悲しい気分を連想させるというだけなら、共感覚に基づいたものであるし、その色から何か辛い経験が思い起こされ実際に悲しくなることを伝えているのであれば、それは単に説明的な表現でしかないが、どちらの意図で用いられているのかははっきりしない状況も少なくないと思われる。

しかし、判別しにくい場合があるとは言え、気分を表すことばが共感覚に基づいて五感を表現できるというのは、確かなことである。五感を表現し、また逆に五感に固有のことばによっても表現され得るということは、少なくとも言語において、日本語において、気分のことばが五感のことばと同じレベルの一つのまとまりを成しているということになる。言語において気分を表すことばが、五感のことばと同じような位置を占めているということは、つまり、気分というものが五感と同じように一つの感覚として捉えられていることを示している。

結 び

以上、本論では、共感覚に基づいて五感を表す表現を観察することにより、五感以外にも感覚が存在することを示し、更にその感覚とは、次元感覚、動静感覚、気分感覚であるということ論じてきた。

また、本論では論じなかったが、“五感”として扱われている五つの感覚自体も見直すべきかもしれない。感覚を五つに分けるとするのは、人間の体に備わった目に見える受容器官の数に依っているだけのことで、実際に人が感じる感覚の種類に合わせた分類ではない。例えば、“視覚”というのは“目で感じる感覚”という意味で用いられる語だが、実際には“色”と“光（明るさ）”の感じ方には差があるように思われる。この二つは別の感覚として捉えるべきものかもしれない。“明るい色”という表現も、“暖かい色”（触覚で視覚を表現）と同様、光感覚で色感覚を表現する共感覚に基づいた比喩表現かもしれないのである。

本論で言う“感覚”には、生物学的裏付けがあるわけではない。また心理学的な実験により確証を得たものでもない。言語現象を観察した結果、言語において、日本語において、“感覚”と分類されていると思われるものを“感覚”として扱っている。言語を観察すると、言語において五

感固有の表現と同じ位置を占める表現が存在することが分かる。言語というのは、人間の物事の捉え方を反映するものであるとすると、五感と同じように捉えられる何かが存在するということになる。五感と同じように認識されるものであるならば、生物学的に根拠がなくとも、言語学的あるいは認知的には、一種の“感覚”と言えるのである。

参 考 文 献

- Hall, E. T. 1966. *The Hidden Dimension*. Doubleday & Company, Inc.
- 国広哲弥 1989. 五感をあらわす語彙：共感覚比喩的体系. 言語, 18, pp.28-31. 大修館書店.
- 楠見 孝 1988. 共感覚に基づく形容表現の理解過程について：感覚形容語の通様相的修飾. 心理学研究, 58, pp.373-380.
- 1990. 比喩理解の構造. 芳賀 純, 子安増生編, メタファーの心理学, pp.63-88. 誠信書房.
- Lakoff, G. & Johnson, M. 1980. *Metaphors We Live By*. The University of Chicago Press.
- Smith, J. 1989. *Senses and Sensibilities*. John Wiley & Sons, Inc.
- Williams, J. M. 1976. Synaesthetic adjectives: a possible law of semantic change. *Language*, 52, pp.461-478.
- 安井 稔 1978. 言外の意味. 研究社.
- 山梨正明 1988. 比喩と理解. 認知科学選書 17. 東京大学出版会.